

黙示録2章12-17節 「妥協を許す教会」

1A 忠実な証言 12-13

2A パラムの教え 14-16

3A 隠れたマナ、白い石 17

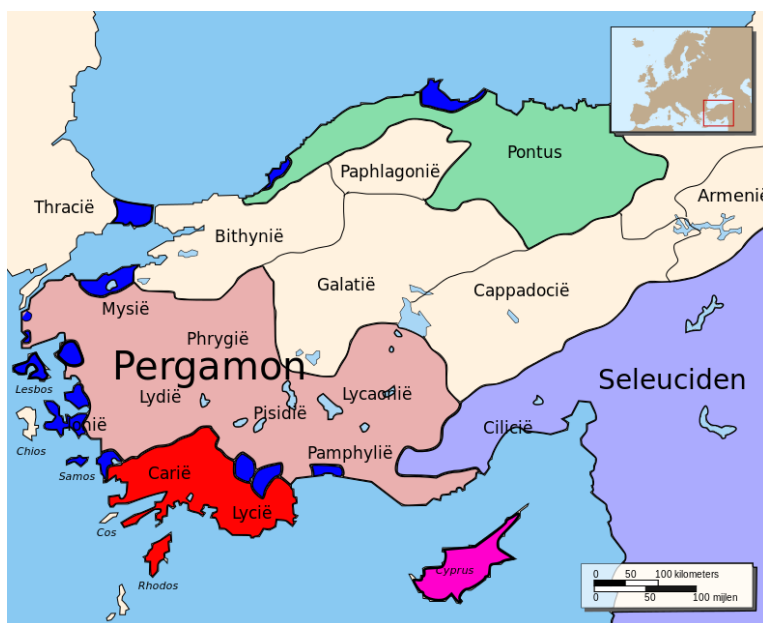
本文

黙示録 2 章を開いてください、今日は 12 節から 17 節まで学びます。七つの教会に対するイエス様の言葉を見て行っていますが、今日は三つ目、「ペルガモにある教会」に対するものです。

1A 忠実な証言 12-13

12 また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。
13 「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。

ペルガモにある教会です。ペルガモという町は、スミルナから約 80 ㎞北にあり、地中海、エーゲ海から内陸に約 25 ㎞入ったところにあります。ペルガモは、スミルナまたエペソと同じような歴史を持っている町です。ここにギリシャ帝国の主権の中で、アッタロス朝と呼ばれるペルガモの国の首都として栄えました。そしてローマ時代に、その王がここをローマに譲渡することになり、アジアの属州の中心的な都市となり、繁栄を続けました。紀元前 29 年に、皇帝アウグストに捧げられた



宮を建てるのが許され、それで小アジアの中で、最初にカイザルを崇拜する異教の神殿が建てられました。スミルナの町を前回は見ましたが、スミルナが第二の都市であります。

ここには、驚くばかりの遺跡が今も残っています。エペソとスミルナもそうでしたね。基本的にギリシャ由来の町は、「アクロポリス」と呼ばれる自然の丘を防壁で固めたところに、神殿やその他の建物が建てられます。そこに、また後世に建てられた大きな神殿、「トラヤヌス神殿」があります。皇帝トラヤヌスを祭ったところ。そして大きな図書館がありました。エペソにもありましたが、こちらには二十万冊があったと言われます。ローマ帝国には、エジプトのアレクサンドリアが栄え、そ

ちらは、パピルスによる本を占めていて、エジプトがそれを占有していたので、こちらでは羊皮紙によるものが生産されるようになったということです。そして、円形劇場があります。2万4千席を収容するエペソには及びませんが、一万人を収容したそうです。



Pergamum acropolis from Asclepium

そして、ギリシヤの神々の神殿が建てられています。これが悪い意味で、驚くばかりです。最も際立っているのは、ゼウスの大祭壇と呼ばれているものであります。今は、その土台の部分しかありませんが、なぜなら、二十世紀の初めにドイツがその多くを自国に持ち去ったからです。そして彼らは、「ペルガモン博物館」をベルリンに建てました。1930年の事です。後で詳しく説明しますが、その形はまさにナチス・ドイツのヒトラーが演説をしたところにそっくりであり、いや、ナチスがその大祭壇を真似たのです。ゼウスは、ギリシヤの神々の中で主神であり、全知全能と言われ、権力や力、何かにつけてはゼウスに拠り頼むというものでした。



そして、アテナ(あるいはアテーナー)神殿があります。この女神は、知恵や理知の神であります。何かにつけ、自分が知恵を得たい、知識を得たいとするならば、この女神にすがりに行きました。今で言うならば、専門家のところに行って講演を聞いたり、何らかの知識を得て自分を満たそうと

するその欲求でありましょう。それから、ぶどう酒の神、ディオニュソスの神殿があります。これは、簡単にいうと「羽目を外したい」という時に行くところです。オカルト的礼拝でありました。強い麻薬を混ぜたぶどう酒によって、参加者たちは恍惚状態に陥ります。そして、酩酊し、錯乱していきました。乱痴気騒ぎであります。時に、人の命まで取られてしまう程であったと言われていました。

それから、ペルガモで有名な神殿は、「アスクレピオス」であります。これは医療の神です。この神について有名なのは、蛇の付いた杖です。これは欧米の医療機関ではロゴのような印にまでなっているほど、有名であります。ここが、云わば「医療センター」の役割を果たしており、また、医療や健康に対する異常なまでの拘りも、ここから出ています。いろいろなオカルト的な儀式もありました。夜になって、患者を寝かせてその上に蛇を這わせるであるとか、地下通路を通らせて、通っている患者に叫ぶであるとか、不気味な儀式が含まれていました。アスクレピオスには娘がいて、一人は、清潔と食事への強い執着があり、もう一人には、美と外見への執着があります。今日ある、あらゆる現代的な病はここからむしろ発生していると言ってもよいでしょう。異常な程の潔癖や食事への拘り、また美や外見を異常なまでに駆り立たせる世の中です。

このように、非常に繁栄しており、知的に優れており、しかしながら国の形や文化の隅々にまで、異教の影響がとてつもなく強いという町です。しかし、エペソやスミルナと同じように、こういうところだからこそ、教会が建てられます。ギリシヤによってその世界が言語と文化で統一され、そしてローマによって政治的にも統一しました。そして今のトルコ、小アジアは東洋とローマをつなぐ中間地点であり、そこにキリスト教会が建てられたということは、ローマ帝国全体への福音の伝達が容易くなったということです。ですから、福音宣教においては戦略的でありながら、しかし、キリスト者として生きることは、とてつもない圧迫でありました。

その中でイエス様は、「鋭い、両刃の剣を持つ方」として現れます。イエス様が使徒ヨハネに現れた一部であります。イエス様の言葉があり、その言葉は人々を突き刺す力を持っているのだ、ということです。ペルガモにある教会には、主に忠実な者たちが多くいた一方で、偽の教えをする者たちがいたのですが、それを許してしまっていました。自分たちは神の言葉をしっかりと守っていましたが、偽の教えをする者たちが一部にいて、それをそのままにしてしまったのです。それで、主がご自分の御言葉をもって裁かれます。

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。」とイエス様は言われます。これは先に説明した、とんでもない異教の町であったからです。イエス様は、再び、「あなたの住んでいる所を知っている」と言われます。これはとても慰められる言葉です。私たちが、文化的に、社会的に、また家庭環境や職場の環境において、とてつもない圧迫を受けている時に、イエス様は、「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。」と言われます。

「サタンの王座」であります。これがどこを指すのか、いろいろな意見がありますが、私はその

一つ一つの集合体なのではないか？と思います。一つの意見はゼウスの大祭壇です。その祭壇には、銅でできた雄牛の像がありました。その中は空洞になっており、人がその中に入ることができます。そして、そこに人を入れて、その牛の下を火で熱するのです。13 節に、「わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺された」とありますが、殉教者はそのような銅の牛の中に入れられた可能性があります。その中に入って、火によって中が徐々に熱くなり、ローストビーフのように蒸し焼きにされます。そして、その時のうめき声や叫び声を、雄牛の口には少しだけ穴が開いていて、そこからうめき声が出てくるようにさせているのです。恐ろしい人身犠牲の祭壇です。けれども、他にはアスクレピオスの神殿もあります。それは蛇が形取られていますから、それがサタンの王座ではないかという意見もあります。さらに、皇帝を神とする神殿もあります。国家への忠誠が宗教の名で行われていましたから、それがサタンの王座とも言えます。

いずれにしても、ギリシヤの神々の異教、またローマの政治体制の中にサタンの力が働いていたということです。サルデスにある教会には、不信者のユダヤ人がキリスト者を迫害していましたが、それはローマから自分たちが守られるために、その既得権益を守るために彼らを疎外したという説明をこの前、しました。ここでは、直接的な迫害であったのです。

そして、「わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパス」が殉教したとあります。イエスの御名を守るとは、私たちの信仰の骨格であります。イエス様は言われました。「マタイ 10:32-33 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」私たちが心の中でキリストを主としてあがめることは、とても大切です。迫害や反対の中では知恵が必要であり、聖霊の助けが必要な時にあります。けれども、基本的なところで私たちの信仰は、「イエスは主」というものにあります。これを心で信じるだけでなく、人の前でもはばからず告白する、ということでもあります。そしてイエス様を告白するということは、悪魔を敵にすることです。黙示録 12 章には、「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼(悪魔)に打ち勝った。(11 節)」とあります。

私たちは、自分の信じていること、イエスが主であることを人の前で言い表せば、それこそあらゆる面で圧迫を受けます。それによって、多くの人がつまづきます。イエス様が四つの土の喩えで語られたように、岩地に蒔かれた種は、すぐ芽を出すのですが、根がないので枯れてしまいます。それと同じように、何らかのきっかけで、信仰を捨ててしまう、あるいは歪んだ形で信じて自分の都合に合わせます。そして、世の富や誘惑で思い煩うこともあり、そうすると、茨の中に蒔かれた種のようになります。この言葉が大切であり、「わたしの忠実な証人アンテパス」です。アンテパスは、「全てに反対する」という意味合いがあります。イエス様によって、全てのものに反対することになってもそれでもイエス様が主であると言い表しました。

2A バラムの教え 14-16

14 しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。15 同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。

「少しばかり非難すべきことがある。」とあります。エペソの教会に対しては、「あなたには非難すべきことがある。(2:4)」でありました。少しばかりの非難です。というのは、多くの人はアンテパスと同じように、イエス様の名を堅く守っていたからです。けれども、一部に偽りの教えをする者たちがいて、それをそのまま許してしまっていた、ということです。

その偽りの教えとは、「バラムの教え」であります。イスラエルの民がヨルダン川の東を北上しているとき、モアブの王バラクがイスラエルを呪うように、彼を雇いました。主は、彼に行ってはならないと言われましたが、その報酬を愛したのです。それで主は、ろばの口を開かせて、その気違い沙汰を阻まれました。それでバラムは言って祭壇を築いたものですが、呪うのではなく、かえってイスラエルを祝福する言葉を語りました。主がバラムの口を通して、お語りになったのです。そこで、イスラエルを呪うことは出来ないのですが、バラクからお金が欲しかったのです。「私たちがイスラエルを呪うことができないならば、イスラエルが神から呪われるようなことを行なえば良い」と考えました。そこで彼は、モアブ人の娘をイスラエルの宿営に送り込むようにバラクに助言して、イスラエルの男たちは、モアブ人の娘と不品行を行ない、また彼女たちが持ってきたモアブ人の偶像を拝むようになってしまったのです。そこでイスラエルに神罰が下りました。バラクの思惑通りになったのです。

つまり、バラムの教えがペルガモの町にある教会に入り込んできていたというのは、「偶像礼拝や性的不品行は仕方のないことだ。」とする教えのことです。それらのことを行なっても、神に対して罪にならない、という教えです。しかし私たちは、キリストによって聖潔を求めるように命じられていますね。「エペソ 4:17-21 そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなししい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。」イエス様は私たちに罪や汚れから離れ、神の愛とご自身の愛の中に留まるように教えておられました。そして憐れみをもって、罪の中に生きる人々に福音を語り、キリストの血によって解放されることを手助けするように命じられていました。しかし、その偽教師は、そのままの貴方でよいのだよ、と教えていたのです。

けれども、どのような形でバラムの教えが許容されてしまったのでしょうか。「それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。」と主は言われます。ニコライ派は、「人々を支配する」という意味合いのある教えです。霊知と呼ばれているもの、霊的な知識があると言われるグノーシス主義のような異端であったのかもしれませんが。つまり、いかにも霊的であり、知的であり、もっともらしく聞こえ、偽りの教えを受け入れない人々を見下していくような存在、ただ福音を信じる人々を周縁に追いやるような存在であります。

先日、私はある聖書学者の講演を聞きました。それは、「巧みに聖書の権威を捨ててしまう方法」というものでした。聖書を一節ずつ説き明かすような説教でさえ、その過ちを犯すというものです。ある個所に来て、自分の理解や経験には合わないとして、軽く取り扱うことがあります。夢や幻などの箇所、それが今もあるとは信じがたいとしたならば、適当に読み進めて説き明かしません。それから、話すのが気まづくなるような聖書の箇所では、「本当は話したくないのだけれども」と前置きして、例えば地獄について語るというようなものです。神は無慈悲で自分があたかももっと憐れみがあるような物言い、これは高慢であるとします。そして賛否両論が出てくるような、微妙な話題については、「いろいろな意見があるから」と言って言い逃れすることも不誠実であるということです。確かに、本質的でない議論があります。けれども、聖書が一貫してはっきりと言っている部分までも、賛否両論があるからといって喧嘩両成敗にしてしまうことは、極めて不誠実です。同性愛についてどうでしょうか？ イエス様が今にも戻って来られるという期待はどうでしょうか？ こうやって、巧みに、悪い行ないや罪をいつの間にか許容してしまうことを、説教壇からやってしまうという話でした。¹これらは、あたかも愛があり、寛容であり、何か尤もであるかのよう、知的でもあるかのようであります。そして、そのまま実直に信じるのが極端であるとか、主流ではないとか言って退ける空気があります。これこそ、ペルガモの教会が許してしまったことであります。

私たちは、いろいろなところから圧迫を受けます。「それはまともなことではない。」という批判や、無言の圧力があります。それで、いつの間にかいろんな言い訳を作って、そうした圧力から避けていることが多いのです。

16 だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。

悔い改めなさい、という命令です。エペソに対しても主は、悔い改めなさいと言われました。私たちが今、圧迫や反対を感じているので、それで真っ直ぐにイエスさまを話せていないということ、また、信仰について誤魔化してしまっていること、そうしたことがあるならば、悔い改める必要があります。そして、もし悔い改めないならば、と主は言われます。エペソにおいては、燭台を彼らから外すということでした、教会があっても、実質的にはなくなる、聖霊のご臨在、主のご臨在がなくなる

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=7716>

とう警告でした。ここでは何でしょうか？「わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」ということであります。彼らに対してイエス様が戦われるのではありません。そうではなく、バラムの教え、ニコライ派の教えを奉じる者たちに主が、御言葉によって戦われるということです。もし彼らが対処しなければ、主イエス様ご自身が対処されます。けれども、その時は彼らが滅ぼされてしまいます。

具体的には、教会においてイエス様が分裂を引き起こすことでしょうか。御言葉に従って、彼らを取り除かれることをすることでしょう。彼らは御言葉の、自分たちに都合の悪いことを避けて語っていたのですが、その避けている御言葉によってイエス様は裁かれます。イエス様は、律法の一点一画も必ず成就すると言われました。御言葉は全てその通りになります。そして終わりの日に、諸国の王たちが一斉に、神とキリストに反抗して、イエス様の口か剣が出て、それらの軍隊がみな殺されてしまうのですが、彼らがそうした殺される方に回る、すなわち携挙にあずかることもできないし、ハルマゲドンの戦いに至るまでに間、その大患難で神の裁きに遭う、ということでしょう。

私たちは、内部を裁くべきであるとパウロはコリント人への手紙第一で話しました。また、自分自身を裁けば、裁かれないとも言いました。共同体にいる者たちとして、何かおかしいことを行なったり、言い始めたりする人がいる時に、憐れみの心をもってその人が立ち返ることを願うことは、神の命令です。「ユダ 22-23 疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。」彼らが救い出されることを願うのであって、「それでも彼らは救われている」という、誤った励ましを与えてはいけません。

3A 隠れたマナ、白い石 17

17 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。』

イエス様が再び、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」とあります。これは、教会全体に対して語られている御霊の言葉なのだ、ということです。私たちが個々の信仰生活において、世からの圧迫を避けるためにその一部を許容していく。また教会が、世からの反対を避けるためにその一部を許容していくことがあります。

教会史において、とんでもないことが起こりました。長い迫害の中で、それでもキリスト教会がローマにおいて広がっていきました。そしてなんと、皇帝自身がキリスト者となりました。コンスタンチヌスです。313年のミラノ勅令によって信教の自由が与えられました。そして、392年にはテオドシウス一世によってキリスト教がローマの国教となりました。私たちは、この国教というものがどうしても分かりません。信仰を持った時から、社会も国も全くの非キリスト教である日本にいるからで

す。けれども、自分の信じていることが、政治的な、社会的な力を持っているとしたら、どうでしょうか？私は神社仏閣で拝礼行為をすることは、偶像礼拝だと思っています。けれども、国の力で神社仏閣を滅ぼしたらどうでしょうか？けれども、必ずしも国民はイエス様への信仰を持たないまま、形だけでキリスト教徒になった、という人々が大量現われることでしょう。それが、ローマのキリスト教で起こったことなのです。

勝利者に対しての約束があります。イエスを神の御子キリストと信じる信仰者が、勝利者です。彼らには初めに、「隠れたマナ」が与えられます。マナはもちろん、主が日々、イスラエルが荒野の旅をしていた時に天から与えてくださったものです。しかし、それは神の言葉によって生きるためのものであり、イエス様ご自身は、「わたしはいのちのパンです。」と言われました。隠れたマナとは、キリストの内に隠された命のことです。「コロサイ 3:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。」とあります。たとえ、大きな圧迫があって、人々から認められないけれども、あなたには隠されたマナがある、キリストにおいて永遠の命を得ているのだ、という約束です。そして新しいエルサレムでは、命の木から実が出て、それを食べることができる約束があります。

もう一つは、「白い石」です。これの解釈は、いろいろあります。ペルガモの町の遺跡には、白い石があって、そこに文字が刻まれています。いろいろな白い石が使われる目的がありますが、その中で、競技の勝利者が、白い石を宴会の祭りへの入場チケット、無償の食事や競技への入場へのチケットとして受け取るものというのがあります。同じように信仰の勝利者が、天の御国に入ることができるものだ、ということです。そういう解釈も可能でしょう。私は、聖書の中に石についての預言があり、キリストを指し示している箇所注目しています。「ゼカリヤ 3:9 見よ。わたしがヨシュアの前に置いた石。その一つの石の上に七つの目があり、見よ、わたしはそれに彫り物を刻む。」石はキリストを指しています、そして白いのは、清さを示しています。

この方に、「それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」のです。新しい名とは、主なる神が信仰者に親密な関わりを新たにする時に与えられています。ヤコブが御使いと格闘して、イスラエルという名が与えられました。アブラムが、90歳になった時にイサクが生まれるとして、アブラハムという名が与えられました。主がこのようにして、個人的にその人との関係を一新される時に、新しい名を与えてくださいます。私たちはキリストに、その新しい名が将来の御国において与えられている、ということです。私たちは、ですから隠れたマナと、誰も知らない新しい名が書き記されている石、キリストを求めて、その中で世に打ち勝ちます。